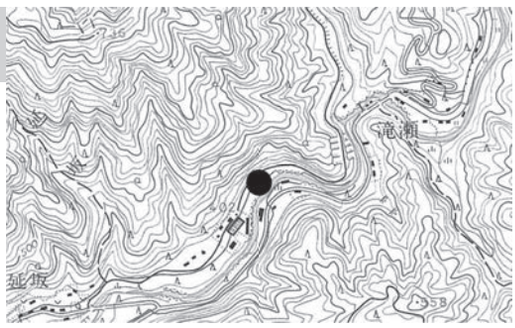
石原（いしはら）遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度6分55秒 東経137度34分22秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成30年5月～平成30年12月

調査面積　7,050㎡

担当者　鈴木正貴・永井邦仁・田中　良

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

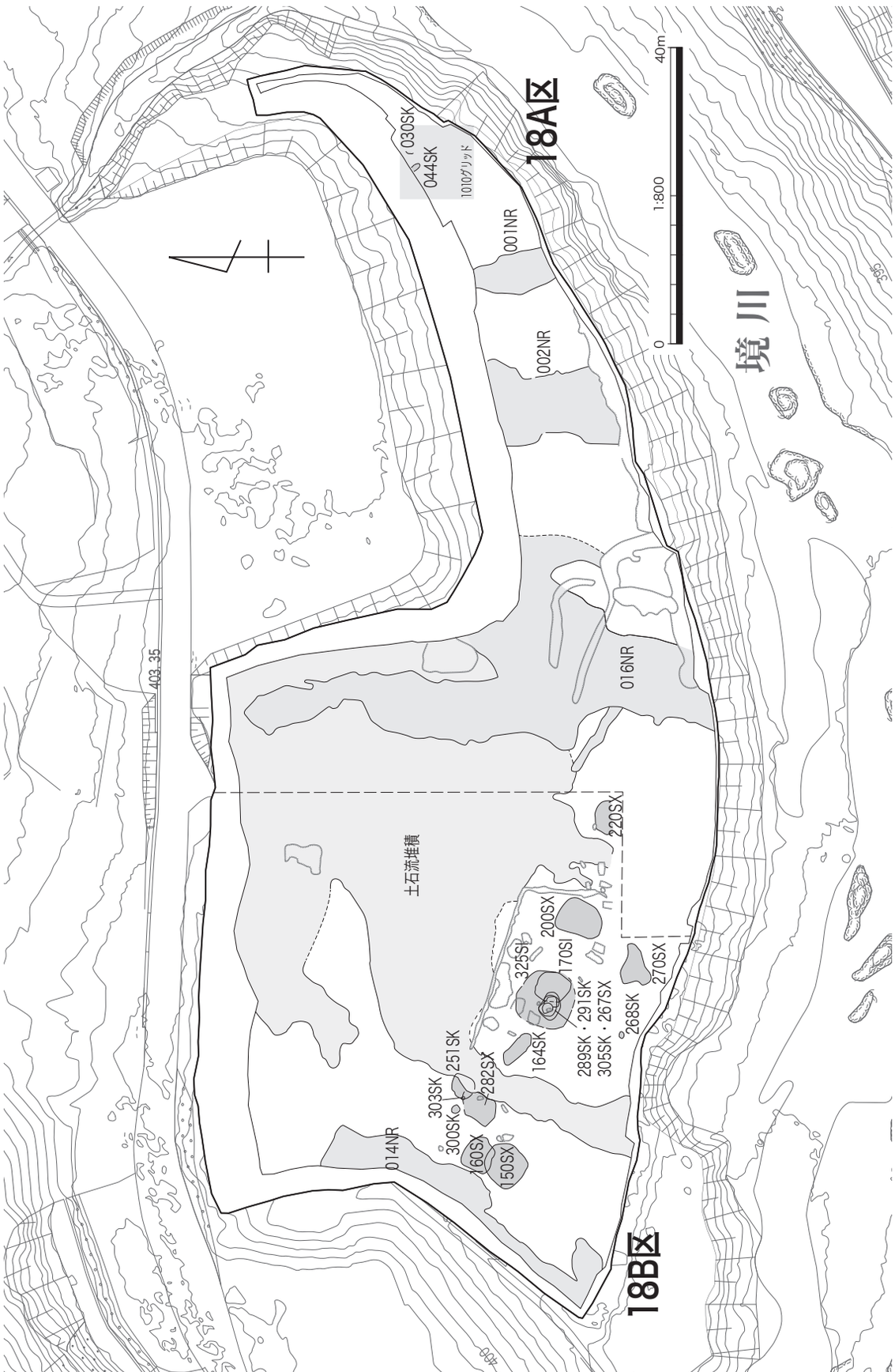
立地と環境　石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する（川向地区）。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。このうち最上流の左岸に所在するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面（標高405～418m）にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要　今年度発掘調査が行われた緩斜面は、地表面下約3mで片麻岩の岩盤となっている。その上層には、①角・円礫が多く混じる砂礫層の範囲と、②礫の少ない砂層の範囲とがある。前者は主に上流側に分布し、後者は下流側に分布する。特に縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構が集中して検出されたのは②の砂層頂部であるが、当該層は現河道に沿って発達した自然堤防とみられる。一方、当該地点から北側の斜面へ続く一帯は、砂層の上位に③長径15～50cmの角礫を多く含む粗粒砂が堆積している。当該層中には縄文土器や石器だけでなく、一部に近世後半の陶磁器類も含まれることから、縄文時代から近世後半までの間に複数回発生したとみられる土石流堆積に起因するものと考えられる。

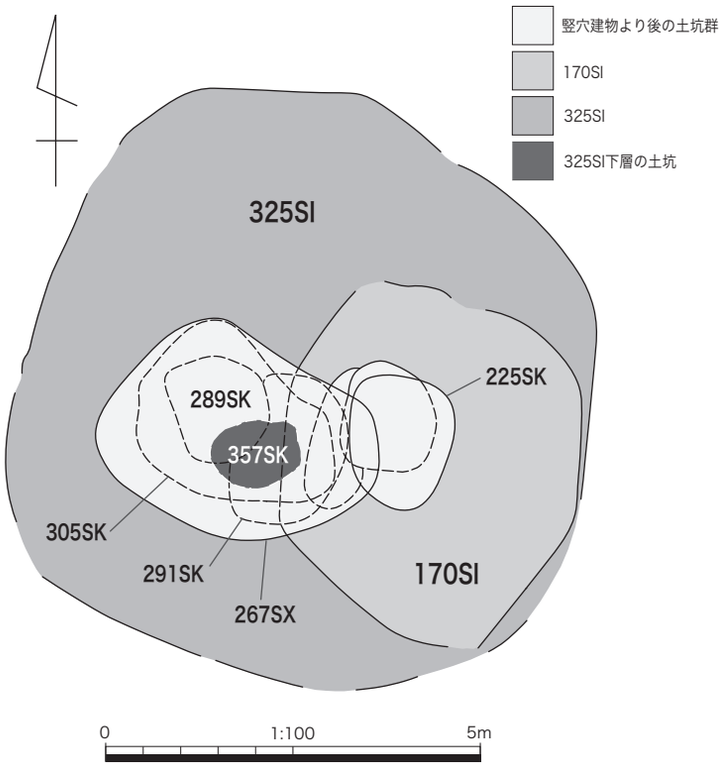
以上のように石原遺跡では大別して3種類の砂層がみられた。調査では、これに対応してA区南東部で①砂礫層、A区北西部およびB区北半部では③土石流堆積層、B区南半部では②砂層の各上面において遺構検出を行った。なお土石流は本来あった遺構面を破壊しているが、その端部では若干の下層遺構を検出することができた。（永井邦仁）

A　区　A区東端で、現代の造成土の下から暗褐色土の間層をもつ上下2層のシルト質の黒色砂層が検出された。このうち、上部黒色砂層からは、近世の陶磁器片や縄文土器片、剥片などが出土した。一方、下部黒色砂層の上面では土坑などの遺構を20基以上検出した。土坑内や下部黒色砂層中から、後期や晩期の土器片が出土しているため、遺構も当該期の可能性がある。特に1010グリットでは、遺構や遺物が良好な状態で検出された。

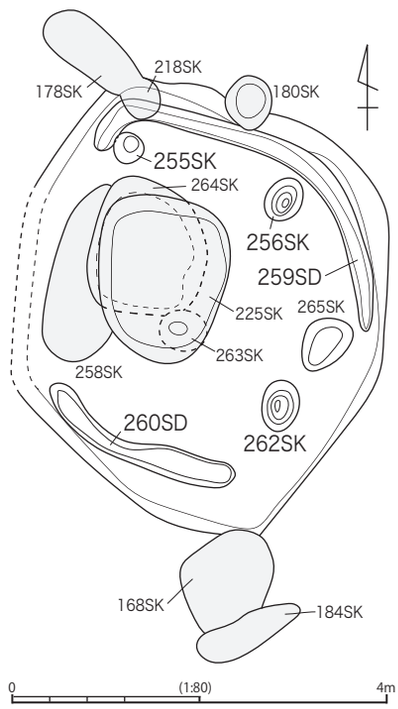
030SK　030SKは、下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、凝灰岩の剥片や石核が約30点出土した。これらの一部は接合関係にあることから、石器製作に関わる廃棄または埋納の可能性が高い。この土坑からは土器が出土していないため明確な時期は不明だが、周辺で出土している土器は縄文時代後期以降のものがほとんどであることから、この土坑も後期以降の可能性がある。


18A区
18B区
境川
土石流堆積
030SK
044SK
1010グリッド
001NR
002NR
016NR
014NR
220SX
200SX
170SI
325SI
291SK
267SX
289SK・
305SK・
268SK
270SX
164SK
251SK
282SX
303SK
300SK
160SX
150SX
403.35
0
1:800
40m

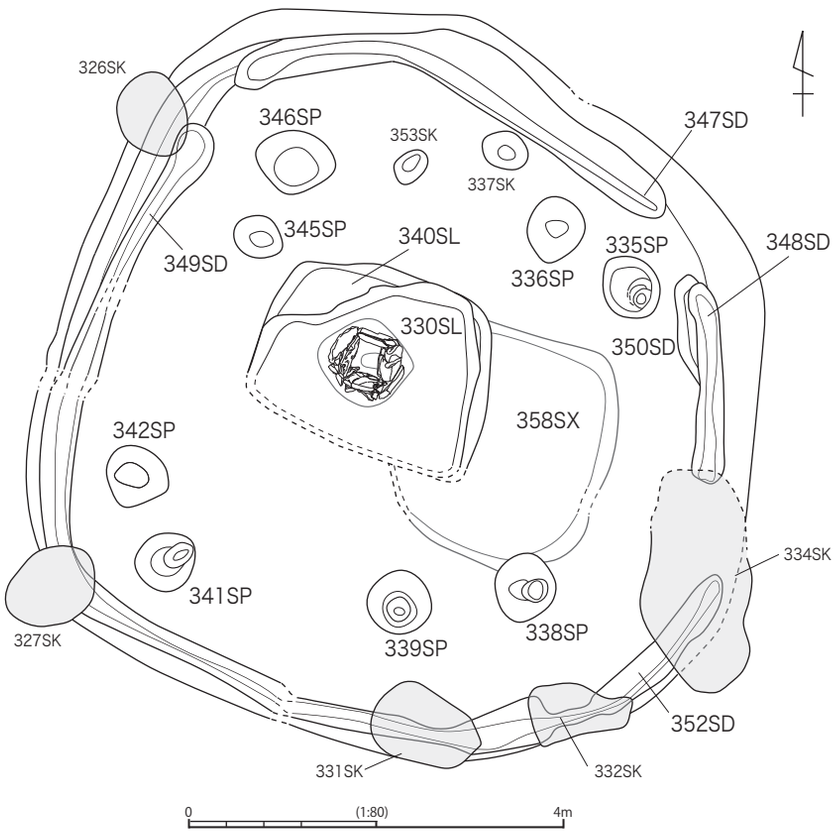
遺構全体図（S=1/800）



竪穴建物跡170SI・325SIと各土坑群の重複関係



竪穴建物跡170SI



竪穴建物跡325SI

044SK　044SK は下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、縄文土器の口縁部が出土している。土器は土坑の検出面付近だけで出土している。土器の時期は縄文時代晩期である。

自然流路

016NR　016NR は幅 4 ～ 28m、全長 64m 以上の自然流路である。先述のように石原遺跡では広範囲にわたる土石流堆積があるが、016NR はその上面で検出されていることから、その最終段階と考えられる。016NR は、途中で屈曲や合流点を交えながら 18A 区西部を南北方向に横切っている。堆積層は直径 20cm 以上の角礫を多量に含む粗粒砂が主体で、土石流もしくは収束後の沢の様相を示している。その起点は、地形から類推すると遺跡北東部の緩斜面が考えられる。016NR からは黒曜石製の石鏃や塩基性岩製の磨製石斧などが出土しているが、いずれも摩滅や擦痕がみられるので、より上位の地点から流されてきた可能性が高い。

B　区　B 区の北半部では、土石流堆積の上面で若干の土坑や溝状遺構が検出され、縄文土器小片などが出土している。一方､南半部では先述のように細粒砂主体の河川堆積が広がる。このうち川近くは耕作などにより削平されていたが、中期の縄文土器が出土する土坑 268SK など若干の遺構がある。その北側の一帯では、竪穴建物跡 2 基（170SI・325SI）をはじめとする大小の土坑群が検出されている。170SI は 325SI の埋土に構築されたもので、さらにその埋土を掘り込む土坑群 (289SK、291SK など) があり著しい重複をみせている。

150SX　150SX は直径約 5m、深さ 30cm の浅い窪地地形を呈する。検出時に遺物が多量に出土したが、下部では遺物がほとんど出土していない。これは、浅い窪地地形に遺物が二次堆積したためと考えられる。縄文土器の時期は縄文時代中期前半である。

170SI　170SI は直径約 3.8m の竪穴建物跡である。平面形はやや不整円形を呈し、壁溝を伴っている。検出面からの深さは最大で約 0.2m と浅く、埋土の上から掘り込まれた土坑群 (225SK など) は床面を一部抉りこんでいる。そのため検出された柱穴は 3 基にとどまる。床面からは若干の炭化物が出土しているが炉跡は検出されなかった。出土遺物は早期後半の 1 点を含む少量の縄文土器や黒曜石の剥片などが出土している。出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

251SK　251SK からは、縄文時代中期前半の土器と溶結凝灰岩製のスクレイパーや石錐、剥片、磨石などが出土している。出土石器の一部に黒曜石が含まれているが、大半は溶結凝灰岩である。この時期の確実な共伴事例として注目される。

289SK　289SK からは、縄文時代中期前半の土器や黒曜石製の石鏃、剥片などがまとまって 20 点ほど出土したほか、炭化物も多く含まれていた。また、拳大以上の亜円礫や円礫が一定の高さでまとまって出土している。

291SK　291SK は 289SK に隣接する土坑で一部が切られる。こちらも 289SK と同様に縄文時代中期前半の土器や石器が出土する。289SK よりも黒曜石の剥片などが多く出土している。

300SK　300SK は縄文土器片が約 0.2m 四方の範囲でまとまって出土した土坑である。土器片は同一個体と考えられるが、口縁部付近に限られており、全体の復元には至っていない。時期は縄文時代中期前半である。土器だけでなく、剥片も出土している。

303SK　303SK は 300SK と同じく縄文土器がまとまって出土した土坑である。大きな土器片の下にも土器片が重なっている。おそらく横位で置かれた土器が土圧などで押しつぶされ、土器片が約 0.15m の範囲からまとまって出土したとみられる。

325SI　325SI は直径約 7.8m の竪穴建物跡である。平面形は隅丸方形に近い円形を呈する。重複関係にある 170SI の下位にあり、部分的に間層が認められる。残存状況が良好で、検出面からの深さは最大で約 1m である。床面には幅約 0.2m の壁溝がめぐり、柱穴とみられる 8 基以上の土坑が検出されている。柱穴の一部には抜き取り痕も認められる。また中央には石囲炉がある。石囲炉は、まず床面に一辺約 2.4m の方形の掘り方をもつ 1 時期目の 340SL が構築される。その後、敷設された 4 つの棒状もしくは板状の礫の一部を据え直すとともに、その内側に礫を追加して 2 時期目の 330SL が構築される。いずれも埋土に炭化物や焼土を多く含むが灰はみられなかった。以上のように石囲炉の改作が行われていることから、主柱穴もそれに対応して抜き取られていると考えられ、建て替えがあったと想定される。

ただし出土遺物は遺構の規模に対して少なく、若干の縄文土器や黒曜石の剥片が出土している。遺構の時期は出土土器から縄文時代中期前半と推測される。

ま と め　石原遺跡では A 区と B 区で異なる時期の遺構や遺物が検出された。A 区では縄文時代後期と晩期、B 区では縄文時代中期前半が主体である。また、石器石材についても大きく様相が異なる。A 区では凝灰岩や安山岩が主体であるのに対し、B 区では溶結凝灰岩と凝灰岩が主体となっている。このことは､縄文時代の石材利用の変遷について考える上で、重要な事例となるであろう。

A 区は、竪穴建物跡は検出できなかったが、約 20 基の土坑や遺物を含む自然流路が検出された。なかでも、030SK のように石器製作に関わる残滓が確認できたことは、周辺での活動を類推させる。また、その活動域が北側の緩斜面地に展開する可能性を、1010 グリットで検出された土坑や自然流路に含まれる遺物が示唆している。

B 区では、325SI の下層に黒色砂礫層がある。旧河道に伴う洪水性堆積により一部しか残存していなかったが、この層からも中期前半の土器や石器が出土する。ここで、325SI に関わる遺構の前後関係を整理してみると、黒色砂礫層 → 325SI → 170SI → 291SK → 289SK となる。興味深いことに、このいずれの層からも縄文時代中期前半の土器が出土している。しかも、325SI と 170SI の間に約 3cm の粗粒砂層が間層として入っている。このことから 325SI が洪水等で埋没し、同一地点において復旧して 170SI を構築した可能性がある。このことは、住居が埋没しても再度同じ場所で生活をするということが繰り返し行われていたことを示唆する。

今回の調査では、東海地方でも珍しい縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構や遺物が出土した事例となった。また、縄文時代の石材利用の画期が中期にある可能性を今回の調査で見通すこともできた。

今後の課題として、整理作業等を通じて、B 区の重複する遺構間における時期差やそこに含まれる遺物の差異を検討し、重複する竪穴建物跡どうしだけでなくそれより西側の 251SK や 300SK・303SK とどのように関係していたのかを考えていく必要がある。

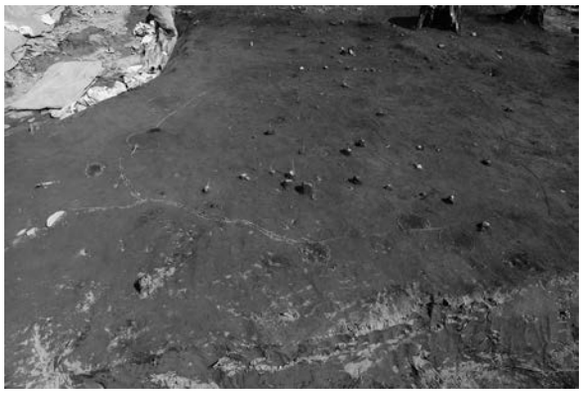
（田中　良）

石原遺跡遠景(西から、B区調査時)

030SK遺物出土状況（南から）

044SK遺物出土状況（南西から）

016NR完掘状況（南から）



150SX検出状況（南から）

170SI完掘状況（南東から）

251SK遺物出土状況（南から）

289SK遺物出土状況（南から）

291SK土層断面と遺物出土状況（南から）

300SK検出状況（南から）

303SK土器出土状況（西から）

325SI完掘状況（南西から）

330SL（南西から）